

目 次

1. 調 査 概 要	1
2. 調査対象地域図	2
3. 福岡県の植生概説	3
4. 凡 例 解 説	10
5. 植 生 調 査 表	25
6. 資 料 リ ス ト	106
7. 調査担当者名簿	107

1. 調査概要

(1) 調査地域の範囲

調査対象地図に示す通り、前回未調査の全地域、すなわち、No 1 3 直方、1 4 太宰府、1 5 甘木、1 6 久留米、1 7 山鹿、2 1 脊振山、2 2 佐賀、2 3 大牟田、2 4 荒尾の5万分の1地形図9枚分て、県面積のほぼ半分にあたる。

(2) 調査の方法

9枚の地形図を、(1)No 1 3 直方、(2)No 1 4 太宰府およびNo 1 5 甘木の東側半分、(3)全前の西側半分、(4)No 1 6 久留米、(5)No 1 7 山鹿、No 2 3 大牟田、No 2 4 荒尾、(6)No 2 1 脊振山、No 2 2 佐賀の6区に区分し、各区それぞれ2名(第5区だけは3名)の調査員を配当し、各区ごとに植生調査を行った。

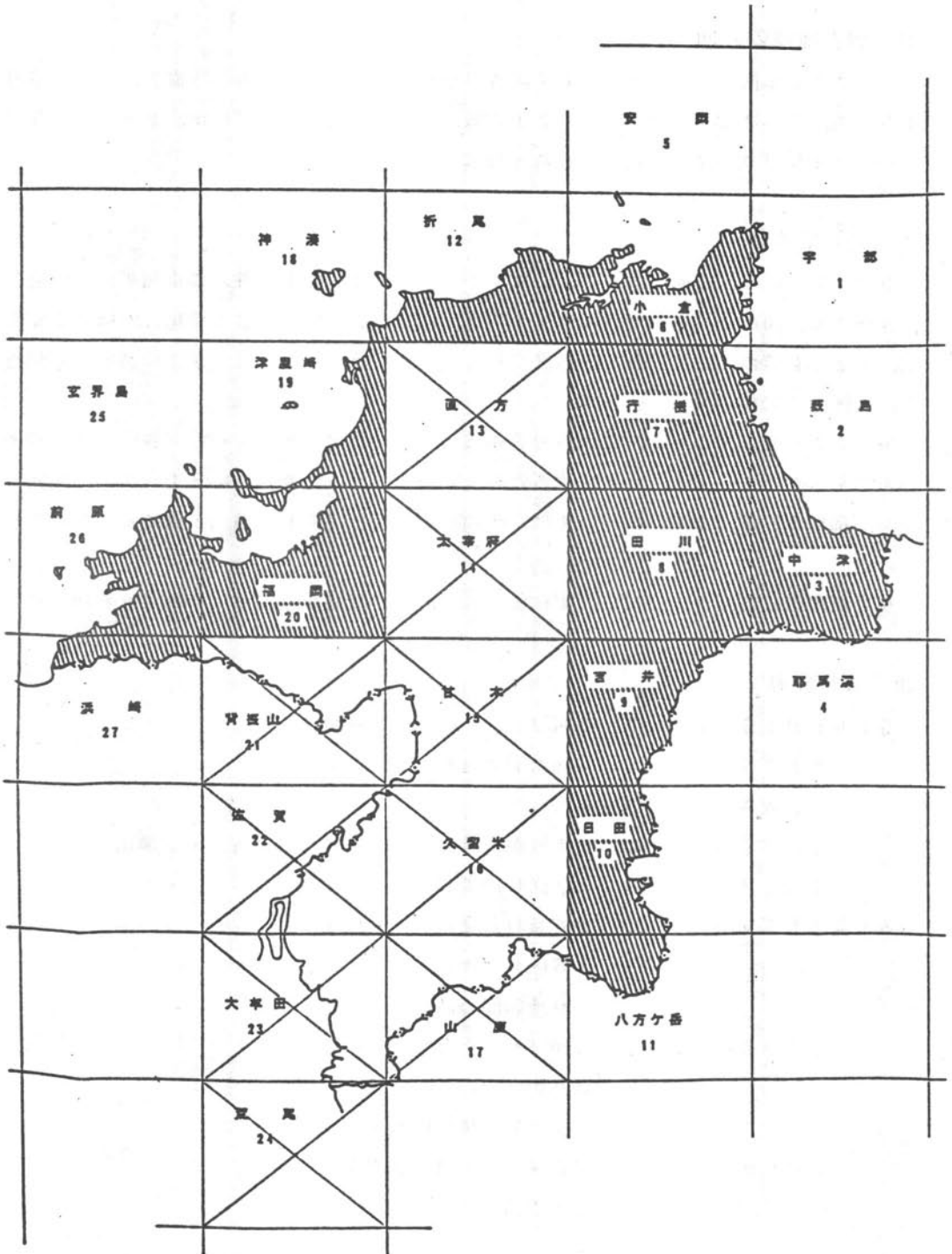
植生調査は文献によらず、環境庁の要綱にのっとって実地調査を行い、各区の凡例にあがる郡落については調査表を作成することを原則とした。ただし、No 2 1 脊振山の範囲のうち、福岡市に属する部分については、昭和57年度に実施した植生調査の結果を利用した。

現存植生図は各区責任者によって作成された。その際航空写真はできるだけ利用した。

(3) 調査経過

- 58年6月16～17日：九州ブロック会議（長崎）
6月25日：福岡県調査員打合せ会（県庁）
以後各区ごとに調査開始
7月22日：調査要領を統一するための合同調査（宝満山）
8月23日：第2回合同調査（九千部山）
59年1月28日：調査員打合せ会（県庁）
郡落区分の決定
隣接地図間の照合調整
2月20～21日：九州ブロック会議（長崎）
新凡例についての処置
隣接県間の植生図の照合
2月29日：現存植生図・植生調査表
完成提出

2. 福岡県調査対象地域図



3. 福岡県の植生の概説

(1) 気 候

福岡県の気候は、平地部では年平均気温が16℃前後、年降水量2,000mmくらいのところが多い。夏は極めて暑く亜熱帯的で、降雨量も多く、表日本型の気候である。これに反し、冬は北西季節風を受けて曇天や降雨(雪)の多い裏日本型気候に近づく。県内は次の3気候区に分けることができる。

山陰型気候区 北部沿海地域で、冬は季節風をまともに受ける。なお、北九州市沿岸は工場が多いため山陰型気候区の中で比較的年最低平均気温が高く、スモッグも生じやすく、北九州工業気候区として分けることもできる。

瀬戸内海型気候区 周防灘沿岸部で、他地域にくらべ最も降水量が少ない。

西九州内陸気候型区 まわりを山地にかこまれた筑豊・筑後地方で、四季を通して最高気温が高く、最低気温が低い。年間暴風雨日数が少なく、福岡の約4分の1である。有明海に面した有明海型気候区と、昼と夜、夏と冬の気候較差が最も大きく、秋季に霧の発生が多いなどより盆地的特色の強い筑豊盆地型気候区に細別される。

なお、山地では高度の上昇に伴う気候の遞減により、脊振山地では海拔700mm、英彦山地では800mm、釈迦ヶ岳山地では830m以上は1月の平均気温が0℃以下となり、冷温帯の気候となっている。この下限線は、ほぼ吉良竜天の暖かさの指数85℃の等温線に一致している。

(2) 地 形

山地筑紫山地は県北半に位置し、地形的には準平原化が進んだあと隆起浸食されたもので、高くも1,000m前後のなだらかな地形である。数本のほぼ南北に走る断層線によって塊裂している。東から企救山地・貫山地・福智山地(皿倉山・福智山901m・香春岳)・三郡山地(西山・犬鳴山・鉾立山・若杉山・砥石山・三郡山938m・宝満山869m・大根地山)、その続きである古処山地(古処山862m・屏山927m・馬見山978m)がある。また、これらの間や付近に丘陵性の宗像三山(城山・孔大寺山・湯川山)や全国山地(全国山)、立花山その他がある。筑紫山地の最も西には佐賀県との境をなす脊振山地(九千部山847m・脊振山1,055m、金山967m・井原山983m・雷山955m・羽金山900m・浮岳805m・十坊山)がある。水縄山地(鷹取山802m・発心山・高良山)は筑後川の南側に東西に走る典型的な断層崖である。

県の東南縁は、英彦山地(経読岳992m・犬ヶ岳1,131m・英彦山1,200m・岳滅鬼山1,018m)、釈迦ヶ岳山地(熊渡山960m・御前岳1,211m・釈加ヶ岳1,231m・三国山994m・国見山1,108m)などの火山性の山で、大分県との県境をなし、三国山から先は熊本県との県境となる。これに続いて、筑肥山地が県の最南縁をなすが、400~500m前後

の低い丘陵である。

河川と平野・周防灘沿岸では、これに注ぐ今川・祓川などによって豊前平野が形成された。遠賀川は彦山川・嘉麻川などを合せて響灘に注ぎ、筑豊平野が形成された。福岡市およびその周辺では、多々良川・那珂川・室見川などが博多湾に注いで福岡平野を形成した。

糸島半島は、瑞梅寺川や雷山川の沖積作用によって、かって島であった部分につながったものである。

有明海には筑後川や矢部川が注いで筑後平野が形成された。

海岸 響灘や玄界灘に面する北岸は、砂浜が発達し、志賀島をつなぐ海の中道のような長い砂しもある。また、丘陵が海に迫って、岩礁や礫浜となる所も少なくない。

有明海に面する一帯や、周防灘に面する一帯は遠浅の砂泥海岸が続き、干拓も行われている。

(3) 地 質

福岡県は、地質構造上西南日本の内帯に属し、筑紫山地は中国山脈の延長に当る。地質は複雑で、古生界・中生界を基盤とし、これを貫いて広範囲にわたる花崗岩類の貫入が見られる。福智山・三郡山～宝満山・脊振山地などの山体の大部分は、花崗岩から成る。

古生界 砂岩・貝岩・粘板岩から結晶片岩に至るまで、変成度のいろいろの段階がある。企救山地～貫山地～福智山地南部にかけては、粘板岩・砂岩・チャートなどが多く、これらは石灰岩や輝緑凝灰岩を伴う。結晶質石灰岩は平尾台のカルスト台地が有名であるが、香春岳もこれと一連のものである。その他古処山頂に結晶質石灰岩の露頭があり、脊振山地の水無にも鍾乳洞がある。

三郡山地北部には、三郡変成岩類とよばれる結晶片岩が多く、脊振山地の糸島方面や能古島にも同系のものが見られる。また、古処山地や筑肥山地にも結晶片岩がある。

中生界 県北部に限られ、門司付近～福智山地北部～宗像三山からその南方にかけて、関門層群とよばれる白亜紀初頭の淡水系の露頭がある。

新生界 古第三系は上記の基盤上にあり、地溝帯や低地に堆積したものである。豊富な石炭層ははさまれており、筑豊・小倉・福岡・三池などの炭田が繁栄した。洪積統は平野部の段丘をなすところが多い。沖積統は平野部にあって、砂・礫・粘土・シルトから成る。

本県の東南県境部は、九州中央火山地域の北部にあたり、英彦山地・釈迦ヶ岳山地には集塊岩や安山岩質溶岩の噴出堆積があり、その後浸食されてメーサ・ピュートなどの地形が著しい。一方北部海岸地方には第三紀末に玄武岩の流出があり、能古島は溶岩台地の形を残しており、糸島郡芥屋の大門の海食洞は柱状節理で有名である。

(4) 植生概説

1. 全般的様相

福岡県の面積は4,958km²である。ここには460万人をこえる人々が生活しており、平地

の要所は市街村落となっている。大きな平野部は水田で占められ、都市周辺では野菜や花の園芸も盛んであり、一方低山にかけては果樹の栽培も広く行われている。

これらの直接生活地を除いたあとの森林原野の面積は2,274Km²で、県面積の半ば近くに当る。この林野は、木材資源を得るため効果的に利用されており、本県の人工林率は62%を超え、全国的に見ても高い値を示している。すなわち、至る所の山地はスギ・ヒノキの人口林と化しつつある。また、海岸では古人から防風林としてクロマツの植林が行われ、本県の海岸景観を特色づけている。その他、規模の大きなモウソウ竹林も各地に見ることができる。

したがって、本県の自然の植生(二次林も含む)は現存林野の約34%、県全体の面積の18%未満である。さらにこれから二次林を除けば、純粋の自然植生は、県全体の面積の1.5%にしかすぎない。照葉二次林の面積は、夏緑二次林を少し上廻っている。

2. 植生帯の区分

福岡県の植生帯は、上方にブナクラス域(ブナ帯または夏緑樹林帯)、その下方にヤブツバキクラス域(シイ・カシ帯または照葉樹林帯)の2帯に分けられる。前者の下限は、暖かさの指数8.5℃の等温線で、北方山地では海拔約700m、南方山地では約800mに当る。後者の上限は、寒さの指数で-10°~15°Cの等温線で、海拔900mに当る。したがって、ヤブツバキクラスの植生(主としてヤブクラス域の上部に位置するアカガシ林要素)はブナクラス域下限線を超えて上方に侵入する。本県の山地は、標高1,000m前後の高さのところが多いので、アカガシ林は尾根すじまで達し、またブナ林と交互して出現する。

以下両帯の植生の概況について述べるが、両帯本来の植生とは様相を異にする河辺・湿原・塩沼地・砂丘の植生、特に人手の加った植林地・耕作地の植生などについては項を改めて述べる。

3. ブナクラス域自然植生

1) ブナ林 ブナクラス域の主体をなすブナ林は、本県の1,000mに達するような山地の峯や尾根すじにあって、その面積は極めて少ない。九州のブナ林は、佐々木好之⁽¹⁹⁾によってシラキーブナ群集と規定されたが、本群集はスズタケスズタケ群団の典型部に外ならない。この群集は林床のササによって3群に区分できる。英彦山地(英彦山・犬ヶ岳)では林床にクマイザサを生じ、脊振山地ではミヤコザサを生じる。ただし、三群山地のブナ林は、林床にミヤコザサを生じないが、あとの組成は脊振山のブナ林と等しい。県南部の釈迦ヶ岳山地では、九州中央脊振山脈と同じく、スズタケを生じている。

2) その他の森林 ブナ林以外の植生は、さらに断片的に存在するにすぎない。脊振山地には、尾根すじ近くに低木~亜高木状のリュウブの群落が認められ、ミズナラ~リュウブ群落として取扱う。英彦山地の障子岳の岩角地には、ごく小規模のヒノキ林があり、ツクシヤクナゲやヤマシグレなどを伴うほか、アカガシ林の要素も混生している。

アカマツ林やケヤキ林は、夏緑・照葉両植生帯にまたがって生じている。アカマツ群落

は、主として岩角地の尾根すじに立地しており、林内に夏緑樹が多い。英彦山地（経読岳雁股山）に見られる。ケヤキ群落は谷すじに立地し、かつては福岡県のブナ帯にかなり広く分布していたと思われるが、その多くは失なわれ、英彦地（経読岳・鷹巣山）や脊振山地などに小規模の林が認められる。

特記すべきは石灰岩地の植生で、古処山頂には国の特別天然記念物となっているツゲの原生林があり、オオヒメツゲ・サイコクイボタ群集（福岡県植物誌 1975）と命名されている。また、脊振山地水無の石灰岩地には、谷すじにアサガラ群落があり、林床はコクサギで被われている。

4. ブナクラス域代償植生

1) 森林 尾根すじに断続して存在するブナ林から下方のブナ帯下限線までは、かつてあった森林は伐採などで一旦消滅し、現在は人工林か代償植生となっている。尾根すじやその付近ではミズナラ林が形成されており、犬ヶ岳の一の岳から二の岳にかけてかなり大きい群落が見られる。その他、鷹巣山や脊振山地（九千部山・脊振山）にも小規模のものが認められる。

最も広い面積を占めるのは、アカガシ・イヌガシを主とするシデ林で、福智山・犬ヶ岳や脊振山地にはよく発達している。

アカマツ林は代償植生として成立することが多いが、ブナ帯での例としては福智山のものがあげられる。

2) 草原 福智山の山頂部はススキ草原となっており、一部には、クマイザサ群落もある。英彦山のスキー場もススキ草原である。

森林伐採地は、ほとんどすぐ次の植林が行われるが、草原状を呈している。

5. ヤブツバキ域自然植生

照葉樹林帯のなかにも垂直的な分布が見られ、海拔約 600m 以上の山地にはアカガシの優占する植生帯（福岡県植物誌のいうアカガシ亜群団、宮脇 1981 のシラカシーアカガシ群団）がある。また海岸沿いの 100~200m の丘陵低地には、海岸低木林およびトベラ・マサキなどの海岸低木林の要素が混生するシイ・タブ林帯（福岡県植物誌のいうトベラ群団・スタジイトベラ亜群団）が位置する。両者の中間が、典型的な照葉樹林帯の主要部である。ただし、この植生帯は人間の生活地として古くから開発されてきた地域で、良好な森林は社寺林などの形で僅かに残っているに過ぎない。

1) モミ林 アカガシ林帯の最上部に位置し、アカガシ林の要素が多く含まれている。良好なモミ林は極めて少なくなり、英彦山の南岳ブナ林直下、および宝満山頂に見られるにすぎない。

2) アカガシ林 県内主要山地に広く分布しているが、多くは伐採されて萌芽林の状態となっており、良好なアカガシ林は点々と散在している。

3) ウラジログシ林 ウラジログシはアカガシ林帯に広く散在し、さらに下方 300m の

高さあたりまで出現する。イスノキ・バリバリノキ・キジョランなどを持つウラジロガシ林（イスノキウラジロガシ群集）は城山・犬鳴山などの斜面に見られる。その他特別な区分種を持たないウラジロガシ群落が各地に散在するが、一応サカキウラジロガシ群集として取扱うことにする。

4) スダジイ林 アカガシ林帯以下には照葉樹林の主要部をなすスダジイ林が広く分布しているが、その大部分は消滅して人間生活地・人工林・萌芽林となっている。したがって、良好なスダジイ林は各地に点在しているにすぎない。沿海地域から低海拔地域にはミズバイを標徴種とするミズバイスダジイ群集が存在し、その多くは社寺林である。各地の神社に見られるイチイガシはごく小規模の林をなしているが、その林にはスダジイ・ミズバイも出現し、スダジイ・ミズバイ群集の下位単位と考えられる。

また、特別な標徴種を持たないヤブコウジースダジイ群集は、アカガシ林帯下方の全域に出現する。海岸沿いでトベラ・マサキなどの海岸低木林の要素が混生する林分は、福岡県植物誌ではスダジイトベラ群集として区分された。さらに、離島や海岸の一部にホソバカナワラビースダジイ群集が点在する。

5) タブ林 離島および海岸の一部には、スダジイを混えることの極めて少ないタブ林が発達している。ムサシアブミ・ノシラン・ハマビワなどを持つタブ林は、典型的なムサシアブミータブ群集から云々と標徴種がかなり欠けているが、北限付近の貧化状態にあるものとして同群集に同定される。さらに貧化した群落がタブ群落である。

6) 海岸低木林 海岸沿いの風衝地に、高木林の下方をふちどるようにトベラ・マサキなどを主とする低木林が発達する。場所によっては、海拔50m前後にまで及んでいる。北岸では、マサキ・トベラ群集とオニヤブソテツ・ハマビワ群集が交互して出現する。周防灘沿岸ではマサキトベラ群集だけとなる。

7) その他の群落 ヤブクラス域のケヤキ林は、高木層はケヤキが占めているが、林内下層には照葉樹が多い。平尾台竜ヶ鼻・福智山・宝満山の谷沿いに見られる。

石灰岩地には特殊な群落が成立する。平尾台・香春岳の岩崖上部に位置するイワシデーイワツクバネ群集、平尾台のドリーネに成立するヤマヤブソテツ・ヤブニッケイ群集、そのほかアラカシーナンテン群集などがある。

6. ヤブツバキ域代償植生

1) 森林 照葉樹の二次林、すなわちシイ・カシ萌芽林は、至るところの山地丘陵に見られ、面積的には人工林に及ばないが、自然植生の林よりずっと大きい。場所によってアカガシ・シイ・タブ・アラカシなどの優占する萌芽林がある。海岸沿いでは、マテバシイやタブ・ヤブニッケイの萌芽林が見られる。

薪炭用に繰り返して伐採されたところでは、コナラが多く入り、コナラ群落を形成する。また、コナラ群落やクヌギ群落にノグルミを加えた群落も、道路沿いに見ることができる。

アカマツ林は、各地の山地丘陵の尾根すじの岩角地に帯状の群落をつくっている。アカ

ガシ林域では、アカマツ林の林内にアカガシ林要素が生育してアカマツ・アカガシ群落となっている。また、コバノミツバツツジヤソヨゴなどを含んで、組成上アカマツ・コバノミツバツツジ群落に当る群落も点在している。

2) 草原 ススキ草原 最も普通にあるのはネザサーススキ群集である。平尾台には、広大な面積のススキ・ネザサの群落上台を占めているのが、このススキ草原はミシマサイコなどを含むカルスト台地独特のものとしてミシマサイコーススキ群集の名が当てられた(宮脇1981)。同じ草原は、香春岳や田川市岩屋の石灰岩地にも見られる。石灰岩地ではない普通のネザサーススキ群集は、竜王山頂(三群山地)や発心山(水縄山地)・三池山頂(大牟田市)など各地に見られる。

チガヤーススキ群落は海岸に見られ、柏、島や京都郡刈田町の埋立地などに知られている。なお、最近の調査で、多くの離島の風衝地に形成されている草原は、ハチジョウススキの群落であることが判明した(福岡市の植生1983. 白島の自然1985参照)。

伐跡群落もほとんどが植林されているが、最初はススキ草原などの景観を示す。

路傍雑草群落 路傍には線状の雑草群落が形成されているが、植生図にはほとんど表わせない。空闲地も同様の群落を生じ、かなりの面積を占める。植物の種類としては、ヨモギ・スギナ・カラスノエンドウ・カモジグサ・エノコログサなどの在来種のほか、ことに都市周辺ではセイタカアワダチソウ・オオアレチノギク、ヒメムカシヨモギ・ヒメジョオン・アメリカフウロ・オランダミミナグサ、などの帰化植物が増加している。

セイタカアワダチソウは戦後爆発的に増加し、河川敷・土手・空闲地を被いつくし、開花時には一面に黄色い独特の景観を呈した。福岡県では一時撲滅作戦を行ったこともあるが、むしろ多くなりすぎて峠を越したような状態になっている。

土手などでは、これらの雑草群落の上をクズやカナムグラが被って、クズ・カナムグラ群落を形成する。

7. 河辺・湿原・塩沼地・砂丘の植生

1) 河辺・湿原の植生 河川上流の流れの速い流辺の砂質土にツルヨシ群集が形成されている。中流以下ではヨシが優占する。水のよどんでいるところでは、コガマ・マコモなどの挺水植物が群落をつくる。ヨシは水中から水辺にかけて生じ、オギ群集はより土手に近い地上に生じる。池沼でも同様な配置が見られる。平尾台広谷湿地・高良台湿地：里木町山中池付近などでは、サワギキョウ・カササゲ・ウキヤガラ・マアザミ・シロイヌノヒゲなどの温生植物が群落をつくる。

2) 塩沼地の植生 河口や入江などの泥土で塩水の影響の強いところにシチメンソウ・ハママツナ・ハマサジ・フクドーシバナ・シオクグなどの群落ができる。ウラギク・ヨシ・アイアシなどを伴って、ウラギククラスにまとめられる。これらの塩沼地植生は、減少の一途はある。

3) 砂丘植生 玄界灘に面する北岸の砂浜のよく発達したところでは、強い風によって

砂丘がつくられる。砂丘の前面ではコウボウムギが優占し、そのあとに背の高いケカモノハシの群落がつくられる。ハマヒルガオ・ハマグルマ・ハマエンドウ・カワラヨモギなどが多く、ハマニカナ・ハマボウフウも点在する。砂地の安定したところではハマゴウの群落ができる。

8. 植林地・耕作地の植生

1) 植林 植林の総面積は県の面積の $\frac{1}{3}$ にも達し、他の森林の約2倍に当たっている。大部分はスギ林 ヒノキ林、丘陵・低山はもとより、山地の尾根にまで及ぶ状況である。クロマツ林は古くから海岸防風林として植栽され、断続的ながら海岸砂浜の後に帯状の群落が連なり、特有の景観を呈している。アカマツ林は坑木として需要があったので、筑豊地方を中心としてかなり植栽されたと思われるが、今日ではその名残りを留めるのみで、新しい植林はごく小規模である。その他の樹種の植林は多くはない。なお、田主丸地方は造園業の中心であり、水縄山地北側の山足沿いに苗圃が多い。

モウソウチク林は各地にかなり規模の大きい林分があり、タケノコ・竹材として利用されている。マダケ林は数は多いが規模の大きいものはない。

2) 果樹園 常緑果樹園としてはミカン園が最も多く、県北では能古島・志賀島・立花山麓、県南では立花町から大牟田市にかけて大規模なミカン園がある。落葉果樹園としては浮羽郡杷木町を中心に巨峰などのブドウ園があり、その他ナシ・カキ・クリなどが各地で栽培されている。

3) 茶畑 八女郡は茶どころとして有名で、本県産の茶の大半が栽培され、八女茶として有名である。その他各地の山間部で栽培されている。

4) 水田・畑地 水田は平野部に広く見られ、ことに筑後平野が米どころとなっている。畑地は段丘・低山が利用されている。

5) ゴルフ場 都市及びその周辺に多くのゴルフ場がつくられている。